Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-02-05

東日本大震災の心理的影響に関する研究II ： 自由記述反応に見る被災者の心理的特徴

齊藤, 誠一
則定, 百合子
岡本, 英生
松木, 太郎

(Citation)
神戸大学都市安全研究センター研究報告,20:229-235

(Issue Date)
2016-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011524

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011524

KOBE UNIVERSITY

神戸大学都市安全研究センター
研究報告，第20号，平成28年３月

東日本大震災の心理的影響に関する研究Ⅱ
―自由記述反応に見る被災者の心理的特徴―

A study on psychological effects of the Great East Japan Earthquake2: Psychological Characteristics of Disaster Victims examined from the point of view from the free description

齊藤　誠一[1)]
Seiichi Saito
則定百合子[2)]
Yuriko Norisada
岡本　英生[3)]
Hideo Okamoto
松木　太郎[4)]
Taro Matsuki

概要

本研究は，福島県中通り地域に着目し，自らを被災者であると主張できないサイレント被災者の心理的健康状態を把握し，支援の必要性とそのあり方の示唆を得ることを目的とした。福島県とその県に所在する大学の学生90 名および保護者41名に質問紙調査を行った。震災による喪失意識は個人差が大きく，獲得意識では「人との絆の重要性への気づき」が多かった。喪失意識だけでなく，獲得意識を持つことが心理的健康と関連することが示唆され，震災を通しての獲得意識をもつことが心理的健康の回復，とりわけ外傷後成長に重要であると言える。被災者が震災で得たものもあったということが意識できるような支援やサイレント被災者の自由な語りの場を提供することも必要であると考えられる。

キーワード：東日本大震災，サイレント被災者，福島県，心理的健康

１．問題と目的

福島県中通り地域は，東日本大震災で地震や津波による大きな被害や，東京電力福島第一原子力発電所事故の直接的な被害は少ないものの，被災後1年経過した時点でも空間放射線量は県内でも高く，除染作業も行われている。しかしながら，直接的な被害を受けなかった住民は放射線被害に対する不安を持ちながらも，原発事故により避難を余儀なくされた地域や甚大な津波被害を受けた他の被災地と比較し，自らを被災者と主張することができず，いわばサイレント被災者となっていることが心理臨床場面などから報告されている。また，県内避難者の受け入れ先になっている地域ではそのことが自らを被災者と言えないひとつの理由にもなっていると言われている。

他方，我々が行った養護教諭などへの面接からは放射線被害の長期的影響について理解できる高校生などは将来何らかの発病があるかもしれない，とりわけ女子では子どもを産めないかもしれないといった不安を抱えていることが報告されており、従来の震災では想定できなかった長期的な心理的問題を有しているものと思われる。加えて，従来から被災体験による心理的外傷としてPTSD などが取り上げられてきており、本研究が対象とするサイレント被災者は原発事故により何ら

かの被災をしているものの，直接的な被災をしていないため，ほとんど心理的支援の対象となっていない。しかしながら，将来にわたる不安とその不安を表明できないストレスによりサイレント被災者は心理的健康を低下させていることが予想される。そこで，本研究ではこうしたサイレント被災者の心理的健康状態を把握し，支援の必要性とそのあり方の示唆を得ることを目的とする。

ところで，サイレント被災者の場合，震災に関する自己にとっての意味や感情などを測定する際に，震災に関わる評定尺度などを用いた場合，被害者ではないという意識が反映されることが予想されることから，本研究では震災で何を失い，何を得たかといった喪失意識と獲得意識を自由記述により測定することとした。また，福島県で被災した者との比較群として近県で被災した者にも調査協力を求めた。

２．方　法

調査協力者

原発事故で避難していない福島県，宮城県，山形県，栃木県に所在する大学の学生 90 名（男性 39 名，女性 50 名，不明 1 名，平均年齢 20.96 歳（*SD* = 1.34））および保護者 41 名（男性 13 名，女性 27 名，不明 1 名，平均年齢 52.44 歳（*SD* = 4.68））。

調査手続きと倫理的配慮

2013 年１～2 月，授業時間などにおいて，以下の調査内容を含む学生用質問紙と保護者用質問紙が封入された封筒を学生に配布し，協力を求めた。封筒の表紙には，回答の拒否や中止がいつでもできること，回答の拒否や中止による不利益は生じないことが記載されており，回答したことにより同意を得たものとみなした。なお，回答は学生用，保護者用それぞれに同封した封筒により，郵送返送を求めた

調査内容

(1) 震災に関わる意識

①震災による喪失に関わる自由記述

震災によって「失った」あるいは「失われた」と感じたことについて自由記述を求めた。

②震災により獲得に関わる自由記述

震災によって「得た」あるいは「得られた」と感じたことについて自由記述を求めた。

(2)心理的健康変数

①外傷後成長

宅（2010）によって作成された日本語版外傷後成長尺度を用いた。「他者との関係」（「トラブルの際，人を頼りにできることが，よりはっきりとわかった」など 6 項目），「新たな可能性」（「新たな関心事を持つようになった」など 4 項目），「人間としての強さ」（「自らを信頼する気持ちが強まった」など 4 項目），「精神的変容および人生に対する感謝」（「自分の命の大切さを痛感した」など 4 項目）の 4 下位尺度 18 項目から構成され，「感じなかった」(0)～「かなり強く感じた」(5)の 6 件法で回答を求めた。

②主観的幸福感

伊藤・相良・池田・川浦（2003）によって作成された主観的幸福感尺度を用いた。「人生に対する前向きな気持ち」（「自分の人生はおもしろい」など 3 項目），「自信」（「ものごとが思ったように進まない場合でも，その状況に適切に対処できる」など 3 項目），達成感（「これまで成功したり出世したと感じる」など 3 項目），人生に対する失望感（「自分の人生は退屈だとか面白くないと感じる」など 3 項目），至福感（「非常に強い幸福感を感じることがある」など 3 項目）の 5 下位尺度 15 項目から構成され，「いいえ」(1)～「はい」(4)の 4 件法で回答を求めた。

③ハーディネス

田中・桜井（2006）によって作成されたハーディネス尺度を用いた。「コミットメント」（「生きがいを感じているものがある」など 6 項目），「コントロール」（「努力すれば，たいていのことは自分の力でできると思う」など 6 項目），「チャレンジ」（「自分とは異なる考えを持つ人と話すことは好きである」など 6 項目）の 3 下位尺度 18 項目から構成さ，「いいえ」(1)～「はい」(4)の 4 件法で回答を求めた。

④レジリエンス

平野（2010）によって作成された二次元レジリエンス要因尺度を用いた。資質的レジリエンス要因である「楽観性」（「困難な出来事が起きても，どうにか切り抜けることができると思う」など 3 項目），「統御力」（「つらいことでも我慢できる方だ」など 3 項目），「社交性」（「交友関係が広く，社交的である」など 3 項目），「行動力」（「自分は粘り強い人間だと思う」など 3 項目）と，獲得的レジリエンス要因である「問題解決志向」（「人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする」など 3 項目），「自己理解」（「自分の性格についてよく理解している」など 3 項目），「他者心理の理解」（「人の気持ちや，微妙な表情の変化を読み取るのが

得意だ」など3項目）の7下位尺度21項目から構成され，「いいえ」(1)～「はい」(5)の5件法で回答を求めた。

(3)デモグラフィック変数及び被災状況

年齢，職業，東日本大震災被災時の所在地などを尋ねた。

(4)分析方法

本データの一部は，齊藤・岡本・則定・松木(投稿中)において学生と保護者では傾向が異なることが報告されているため，本研究では学生と保護者を分けて分析することとする。また，各心理的健康変数の特徴については齊藤他(投稿中)で報告されている。

３．結　果

(1)震災に関わる自由記述の分析

震災による喪失意識(表-1)

分析に先立ち，収集された自由記述を内容により分類し，複数の研究者の合意を得て，26のカテゴリーを設定した。

まず，1個以上した者と全く記述していない者は，全体で76名(58.0%)と55名(42.0%)，県内学生で21名(46.7%)と24名(53.3%)，県外学生で29名(64.4%)と16名(35.6%)，県内保護者で10名(58.8%)と7名(41.2%)，県外保護者で16名(66.6%)と8名(33.3%)であり，県内学生以外では過半数の者が1個以上の記述をしていた。また，複数記述を含むのべ記述数は全体で55個，県内学生24個，県外学生が42個，県内保護者が16個，県外保護者が24個であり，平均記述数では順に0.79個，0.53個，0.93個，0.94個，1.00個であった。全体として，県内学生の記述が他に比べて記述者数，平均記述数とも少なかった。

記述内容について，全体では「住まい・生活環境」「多くの人の命」が，県内学生では「住まい・生活環境」，県外学生では「住まい・生活環境」「多くの人の命」「人間関係」，県内保護者では「住まい・生活環境」「多くの命」「人間関係」，県外保護者では「政府への信頼」が多かった。

表-1「喪失」に関わる記述数(%)

	学生		保護者		全体
	県内	県外	県内	県外	
住まい・生活環境	9(20.0)	9(20.0)	2(11.8)	2(8.3)	22(16.8)
多くの人の命	2(4.4)	9(20.0)	3(17.6)	2(8.3)	16(12.2)
安心感	2(4.4)	7(15.6)		3(12.5)	12(9.3)
人間関係		3(6.7)	2(11.8)	2(8.3)	7(5.3)
政府への信頼	3(6.7)			3(12.5)	6(4.6)
自然環境		4(8.9)		2(8.3)	6(4.6)
友人	1(2.2)	1(2.2)		2(8.3)	4(7.3)
原発への信頼		1(2.2)	1(5.9)	2(8.3)	4(7.3)
仕事		2(4.4)		2(8.3)	4(7.3)
日本技術への信頼			1(5.9)	2(8.3)	3(2.3)
親戚		1(2.2)		1(4.2)	2(1.5)
マスメディアへの信頼	2(4.4)				2(1.5)
金銭	1(2.2)		1(5.9)		2(1.5)
自由	1(2.2)		1(5.9)		2(1.5)
時間	1(2.2)		1(5.9)		2(1.5)
将来の夢	1(2.2)	1(2.2)			2(1.5)
専門家への信頼	1(2.2)				1(0.8)
学力		1(2.2)			1(0.8)
食糧の安全性		1(2.2)			1(0.8)
大学への信頼		1(2.2)			1(0.8)
私的財産		1(2.2)			1(0.8)
健康			1(5.9)		1(0.8)
家族			1(5.9)		1(0.8)
心の余裕			1(5.9)		1(0.8)
友人の生活環境			1(5.9)		1(0.8)
子どもの結婚				1(4.2)	1(0.8)
なし	24(53.3)	16(35.6)	7(41.2)	8(33.3)	55(42.0)

震災からの獲得意識(表-2)

分析に先立ち，収集された自由記述を内容により分類し，複数に研究者の合意を得て，11 のカテゴリーを設定した。まず，１個以上した者と全く記述していない者は，全体で 88 名(67.2%)と 43 名(32.8%)，県内学生で 29 名(64.4%)と 16 名(35.6%),県外学生で 32 名(71.1%)と 13 名(28.9%),県内保護者で 12 名(70.6%)と 5 名(29.4%)，県外保護者で 15 名(62.5%)と 9 名(37.5%)であり，おおむね 6 割以上の者が 1 個以上の記述をしていた。また，複数記述を含むのべ記述数は全体で 101 個，県内学生が 34 個，県外学生が 36 個，県内保護者が 13 個，県外保護者が 24 個であり，平均記述数では順に 0.77 個，0.76 個，0.80 個，0.76 個，0.75 個であった。全体として，記述者数，平均記述数との４つの群とも同程度であった。

記述内容について，いずれの群でも「人との絆の重要性への気づき」がもっと多く，県外学生と県外保護者で「死生観・人生観の変化」と「防災意識」のみ 10%を越えていた。

表-2「獲得」に関わる記述数(%)

	学生		保護者		全体
	県内	県外	県内	県外	
人との絆の重要性への気づき	19(42.2)	18(40.0)	10(58.8)	11(45.8)	58(44.0)
死生観・人生観の変化	3(6.7)	10(22.2)	1(6.0)	3(12.5)	17(13.0)
防災意識	4(8.9)	7(15.7)		3(12.5)	14(10.7)
時間の重要性への気づき	2(4.4)			1(4.2)	3(2.3)
補償金・経済的援助	1(2.0)	1(2.2)	1(6.0)		3(2.3)
自民党政権	1(2.0)				1(0.8)
新たな目標	1(2.0)				1(0.8)
ライフスキル	1(2.0)				1(0.8)
不安	1(2.0)				1(0.8)
強い精神力	1(2.0)				1(0.8)
原発への危機意識			1(6.0)		1(0.8)
記述なし	16(35.6)	13(28.9)	5(29.4)	9(37.5)	43(32.8)

喪失意識及び獲得意識の組み合わせ

喪失及び獲得に関する記述の有無によるグルーピングを学生と保護者ごとに行ったところ，表-3 に示す構成となった。学生，保護者とも喪失あり／獲得あり群が 50%以上と最も多く，震災に関わり喪失だけなく獲得に関する意識も有していた。これ以外の３群では保護者では 10%が分類されたが，学生では喪失あり／獲得なし群が 1 名しかいなかった。

表-3 喪失及び獲得に関わる記述の有無の組み合わせによるグルーピング

	学　生	保護者
喪失なし／獲得なし群	29(32.2%)	8(19.5%)
喪失なし／獲得あり群	11(12.2%)	5(12.2%)
喪失あり／獲得なし群	1(0.0%)	6(14.6%)
喪失あり／獲得あり群	49(54.4%)	22(53.7%)

(2)喪失及び獲得に関する意識と心理的健康変数の関連

今回は保護者の調査協力者数が必ずしも多くないので，より安定した結果を得るために，学生のみを対象に分析を行った。また，先の分析でも示したように，学生では喪失あり／獲得なし群が１名しかしないため，他の３群について心理的変数の比較を１要因分散分析により行った（表-4）。

まず，外傷後成長においては４つの下位尺度いずれでも有意な群間差が認められ，「他者の関係」「人間としての強さ」「精神的変容および人生に対する感謝」では「喪失なし／獲得あり群」と「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い外傷後成長を示した。他方，「新たな可能性」では「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い外傷後成長を示した。

また他の変数でも１つないし２つの下位尺度が有意な群間差が認められた。多重比較の結果から，「喪失なし／獲得あり群」と「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い得点を示したのが主観的幸福感の「人生に対する前向きな気持ち」，レジリエンスの「自己理解」であり，「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い得点をハーディネスの「コミットメント」，「喪失なし／獲得なし群」が「喪失あり／獲得あり群」より高い得点を示したのが主観的幸福感の「人生に対する失望感」であった。

表-4 喪失及び獲得に関わる記述の有無の組み合わせ群ごとの心理的健康変数の平均値と分散分析結果

	①喪失なし/獲得なし群	②喪失なし/獲得あり群	③喪失あり/獲得あり群	分散分析結果	多重比較
外傷後成長					
他者との関係	1.57 (1.10)	2.95 (1.18)	2.35 (1.04)	**	①＜②③
新たな可能性	1.34 (0.87)	1.98 (1.25)	2.14 (1.21)	*	①＜③
人間としての強さ	1.38 (1.11)	2.39 (1.15)	1.84 (1.15)	*	①＜②③
精神的変容および人生に対する感謝	1.38 (0.83)	2.68 (0.82)	2.16 (1.06)	**	①＜②③
主観的幸福感					
人生に対する前向きな気持ち	2.47 (0.69)	3.15 (0.43)	2.88 (0.70)	**	①＜②③
自信	2.37 (0.67)	2.64 (0.57)	2.61 (0.66)		
達成感	2.57 (0.57)	2.82 (0.43)	2.64 (0.52)		
人生に対する失望感	2.93 (0.59)	2.45 (0.70)	2.44 (0.62)	**	①＞③
至福感	2.01 (0.63)	2.27 (0.74)	2.28 (0.68)		
ハーディネス					
コミットメント	2.37 (.070)	2.88 (0.79)	2.86 (0.57)	**	①＜③
コントロール	2.64 (0.41)	2.58 (0.70)	2.66 (0.49)		
チャレンジ	2.54 (0.55)	2.52 (0.67)	2.60 (0.49)		
レジリエンス					
楽観性	3.53 (0.96)	3.36 (0.88)	3.72 (0.74)		
統御性	3.07 (0.67)	3.09 (0.94)	3.35 (0.78)		
社会性	2.80 (0.47)	3.18 (0.54)	3.03 (0.49)		
行動力	3.26 (0.90)	3.18 (0.81)	3.62 (0.77)		
問題解決志向	3.29 (0.79)	3.52 (0.52)	3.52 (0.73)		
自己理解	2.74 (0.72)	2.88 (0.48)	2.89 (0.60)	*	①＜②③
他者心理の理解	3.13 (0.49)	3.55 (0.27)	3.43 (0.34)		

**p<.01 *p<.05

4．考　察

まず，震災に関する喪失意識と獲得意識を自由記述により分析したところ，喪失意識では 26 カテゴリーが設定され，全体の 10%以上が記述したのは「住まい・生活環境」「多くの人の命」に過ぎず，喪失した者に個人差が大きいことが示された。一方，獲得意識では 11 カテゴリーが設定され，全体の 40%以上が「人との絆の重要性への気づき」を，13%が「死生観・人生観の変化」を記述しており，他者との関係を見直し，自らの人生や死についても考える機会を得たものと思われる。さらに，県内学生では喪失意識については過半数の者が記述しておらず，自分たちは失ったものはないとするサイレント被災者の一面を示すものと思われた。

次に，この両意識の記述の有無により調査協力者を分類したところ，過半数の者が「喪失あり／獲得あり群」に分類され，震災により失ったものと得たものがあるという意識をもっていることが明らかになった。一方で，「喪失あり／獲得なし群」は保護者に 14%程度おり，震災によって得たものが見いだせないでいる者がいることも明らかになった。このことは，震災をどのように自己の中で位置づけるかといったことと関連し，今後の精神的健康との関連が注目される。

さらに，前述のグルーピングに基づき，学生においてのみ，1 名しか分類されなかった「喪失あり／獲得なし」群を除く 3 群で心理的健康変数の比較を行ったところ，外傷後成長の 3 下位尺度，主観的幸福感とレジリエンスの 1 下位尺度で「喪失なし／獲得あり群」と「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い得点を示し，外傷後成長，主観的幸福感，ハーディネスの各 1 下位尺度で「喪失あり／獲得あり群」が「喪失なし／獲得なし群」より高い得点を示した。このことから，喪失意識だけでなく，獲得意識を持つことが心理的健康と関連することが示唆された。このことから，震災は人の命をはじめとして多くの喪失をもたらすため，震災を経験することで得ることはあまり取りあげられてこなかったが，震災を通しての獲得意識をもつことが心理的健康の回復，とりわけ外傷後成長に重要であると言える。さらには，被災者が震災で得たものもあったということが意識できるような支援が望まれるといえよう。他方，喪失意識も獲得意識も持てなかった者が全体で 30～40%いることは，サイレント被災者が存在することを示しているともいえ，こうした人たちに言語化できないでいる心情を安心して自由に語ることができる場を提供することも必要であると考えられる。

謝辞：本研究は，都市安全センター平成 24 年度プロジェクトとして助成を受けた。

引用文献

平野 真理（2010）. レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み――二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成 パーソナリティ研究, **19**, 94-106.

伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子・川浦 康至（2003）. 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性 心理学研究, **74**, 276-281.

宅 香菜子（2010）. 外傷後成長に関する研究――ストレス体験をきっかけとした青年の変容―― 風間書房.

齊藤 誠一・岡本 英生・則定 百合子・松木 太郎（投稿中） 東日本大震災の心理的影響に関する研究 1: 2 年後調査報告 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，10.

田中 秀明・桜井 茂男（2006）. 大学生におけるハーディネスとストレッサーおよびストレス反応との関係 鹿児島女子短期大学大学紀要, **41**, 153-164.

著者

1) 齊藤誠一，人間発達環境学研究科，准教授

2) 則定百合子，和歌山大学教育学部，准教授

3) 岡本英生，奈良女子大学研究院生活環境科学系，教授

4) 松木太郎，人間発達環境学研究科，学生

A study on psychological effects of the Great East Japan Earthquake2: Psychological Characteristics of Disaster Victims examined from the point of view from the free description

Seiichi Saito
Yuriko Norisada
Hideo Okamoto
Taro Matsuki

Abstract

The purpose of this study was to research the psychological effects of the experience of the Great East Japan Earthquake in 2011, especially psychological characteristics of disaster victims examined from the point of view from the free description. Participants who lived in Fukushima prefecture and its neighboring regions completed a questionnaire. The result showed that not only many participants lost something, but also they got something in the disaster. The participants who lost something and got something had higher posttraumatic growth, resilience, and subjective well-being and hardiness than those who lost something and got nothing. So the acquisition from the disaster was related to the recovery and the promotion of mental health.

©2016 Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University, All rights reserved.